

社会思想史における個人概念の変遷

大 井 正

Transition of the Concept of “Individual” in the History of Human Social Thinking

Tadashi Oi

前年度においては、「個人」と「私」との同一性に関して、考察してきた。本年度は、「私」と「君」との対立の問題を考察した。この問題については、フォイエルバッハ、西田幾多郎、M・ブーバーなどを取り上げた。

フォイエルバッハは、明らかにヘーゲルの「私」の概念を継承しながら、「私」と「君」との対立を展開させている。ところが、この展開とともにあらわれてきたのは、人間を類 (Gattung) としてみるという思想である。しかし、「私」と「君」と関係が「対話」を本質とするものであって、この点では、デカルトやヘーゲルの homo sapiens の伝統をぬけきることができなかったと同様に、類としての人間も、意識、理性、さらに愛などという観念的なものとしてとらえられている。だが、「私」は、つねに「君」に対立する「私」であるように、意識や理性も、たんに個人のそれではない。そして、ここに Gemeinschaft とか、Gesellschaft とかという概念があらわれてくる。しかし、フォイエルバッハは、まだドイツ古典哲学の枠内にとどまっている。それでも、「私」の問題を、「私」と「君」との対立の問題にまで拡大したのはなぜか？ それはフォイエルバッハが感覚的なもの、個別的なもの、個体的なものを強調したこと、すなわち、その点で唯物論者であったことによる。

以上は、フォイエルバッハがマルクスの先駆者でありえたことの理由ともなるであろう。

西田幾多郎は、実存主義の立場から「私」と「汝」との関係を取扱い、ユニークな見解を展開している。ここでも、この問題は、本来、複数の個物 (個人) の関係の問題に出発している。すなわち、個物 (個人) と環境 (社会)、また、個物 (個人) 間の質的な差異の問題が発展させられている。つまり、個人相互の関係を人格の関係としてとらえようとしたところに、「私」と「汝」との対立がでてくるモチーフがあった。しかし、西田が、環境、すなわち、「私」と「汝」との関

係の場を、「場所」あるいは「絶対無」としてとらえたことは、逆に、個物 (個人) 相互の関係を偶然的なものに転化してしまうモメントになっている。

こうして、個人をたがいに人格的なものとみなすと同時に、必然的につながりあるものとみるにはどうしたらよいかが問題となる。

個人は、最初から個人として取扱うことができる。あるいは、個人と社会との関係について、個人から出発するか、社会から出発するか？ この問題を解決する以前に、「人間」とはなにかを問わなければならない。

人間は、それが動物の一種であり、また、それが他の動物と区別されうとするならば、まず、「道具を作る動物」と定義されるであろう。しかし、この定義をもつことによって、人間は、「個人」(an individual) になるのではない。むしろ、本来、動物としてすでに集団的、類的であったものが、それによって、社会的になるのである。この「社会」とは、だからたんに個体 (個人) の集合のことではない。ここにおける「社会」は、まず生産関係である。この意味では、人間としての人間は、他の動物から区別された限りでの人間は、「個人」である以前に「社会」である。だから、「個人」の問題は、つぎのようにして立直すことができる。

人間としての「個人」は、まず「社会」として存在する人間から、どのようにして展開するのか？ 要するに、「社会」の個別化として「個人」の成立はどういう仕方で行われるか？

この問題提起にかんして考慮されなければならないのは、社会有機体説である。

フォイエルバッハが社会の概念を提出し、マルクスがこれを発展させたことについては以上触れたが、社会有機体説は、これと同時代的現象とみることができる。とくに、コントとスベンサーの学説はそうである。

社会有機体説は、全体から部分へ、社会から個人への方向をとりながら「個人」を説明する学説であるといわれている。そして、マルクスの社会観も、社会有機体説の一つであるとさえいわれることがある。しかし、コントやスベンサーを代表者とする社会有機体説は、実際に以上の通りであろうか。なるほど、社会有機体説は、部分にたいする全体の優位、個人にたいする社会 (有機体) の優位を説く。しかし、このさい、部分即ち個人は物質的=実在的であるにしても、全体即ち社会は、かならず、精神的=観念的である。つまり、社会有機体は、観念的構想物である。これにたい

して、マルクスは、社会をまず物質的な存在とみて、
この見地から個人を説明しようとする。この社会から
個人への原動力は、第1に分業である。